様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：３２４０９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３４７０

研究課題名（和文）独居認知症高齢者ケアマネジメントスキル尺度の開発

研究課題名（英文）Development of Scale for Care Management Skill of elderly people with dementia living alone.

研究代表者
浅川　典子（ASAKAWA, Noriko）

埼玉医科大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：００３１０２５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：地域包括支援センターの主任ケアマネジャーに対するインタビュー調査を行い尺度の項目案を作成、エキスパートレビューにより項目を精選した。ケアマネジャーを対象とした予備調査1（n＝442）、予備調査2（n＝1066）を行い、尺度項目案を修正し尺度原案を作成した。全国のケアマネジャー（n＝4921）を対象として郵送調査を行い、6因子26項目からなる独居認知症高齢者に焦点をあてたケアマネジメント実践力を測定する尺度を開発した。確証的因子分析によるモデルの適合度は良好であった。

研究成果の概要（英文）：Chief Care Mangers at Regional Community Centers were interviewed to develop items for the Scale, which were then reviewed by experts. Draft version of the Scale was created through preliminary surveys1(n=442) and 2 (n=1,066) , conducted with Care Managers.
Care Managers(n=4,921) across the nation were surveyed by mail. The Scale we developed consists of 6 factors and 26 items, focusing on care management of elderly people with dementia living alone. Confirmatory factor analysis demonstrated the model to be quite appropriate.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・　地域・老年看護学

キーワード：認知症　独居高齢者　ケアマネジメント　尺度開発　ケアマネジャー　在宅介護

１．研究開始当初の背景

高齢化の伸展、世帯構成の変化により、認知症という疾患をかかえながら一人で暮らす高齢者が増加すると予測されている。

認知症は記憶と判断力の障害を基本とする症候群である。近年、画像診断の飛躍的発展により診断精度は向上しているが、根本的な治療的接近は未だに困難な状況にある。そのような中、認知症という病気をみるのではなく、認知症という病気を抱えた人をみるという全人的なケアが提唱され、2005 年の介護保険制度の見直しでは、認知症ケアを高齢者ケアの標準とするという観点から改正されるなど、認知症を抱えていても、尊厳を保ち、これまで通りの暮らしを継続していく権利があるという考え方が広がっている。

2000 年の介護保険制度導入に伴い新しい職種としてケアマネジャーが創設され、在宅生活支援の要としてケアマネジメントのしくみが導入された。ケアマネジメントは、利用者の社会生活上のニーズを充足させるため、適切な社会資源と結びつける手続きの総体と定義されており、その基本的な過程は、アセスメント（ニーズ把握）、計画、実施、モニタリング、評価とされている。介護保険制度導入以降、いくつかのケアマネジメント実践を測定する尺度が報告されてきているが、いずれも対象特性に左右されないケアマネジメントの過程に焦点をあてている。

ところで、認知症高齢者は、認知機能の低下により、自己が不安定で、環境の影響を受けやすい存在である。生活を営む力が障害されやすい認知症高齢者の独居生活の継続を支えるためには、質の高いケアマネジメントが不可欠であるが、そのような独居認知症高齢者のケアマネジメントについての研究は途についたばかりである。

独居認知症高齢者の在宅生活継続支援のためのケアマネジメントにおいては、ケアマネジメントの基本的過程に加えて、認知症高齢者の独居生活を支えるという視点からのケアマネジメント実践が不可欠であると考えられるが、そのような実践を測定する尺度はない。

２．研究の目的

本研究の目的は、独居認知症高齢者に焦点をあてたケアマネジメント実践力を測定する「独居認知症高齢者ケアマネジメントスキル尺度」を開発し、信頼性と妥当性を検証することである。

３．研究の方法

（1）尺度を構成する項目案の作成

①主任ケアマネジャーへのインタビュー調査による項目案の作成

・研究目的：地域包括支援センターの主任ケアマネジャーに対する独居認知症高齢者に焦点をあてたケアマネジメント実践に関するインタビュー調査を行い尺度の項目案を作成する。

・調査期間は 2011 年 7 月～8 月である。

・調査方法：A 県内の地域包括支援センターに勤務する主任ケアマネジャー17 名を対象にインタビュー調査を行った。インタビュー内容は、自身の独居認知症高齢者支援の経験、居宅介護支援事業所のケアマネジャー支援を通して独居認知症高齢者へのケアマネジメントに必要であると考えていることである。

・分析方法：インタビューの逐語録を作成し、独居認知症高齢者のケアマネジメント実践の特徴が表れている部分を抽出し、内容が重複している項目を整理した。

②エキスパートレビューによる項目案の精選

・研究目的：エキスパートレビューにより、独居認知症高齢者に焦点をあてたケアマネジメント実践力を測定する尺度の項目案を精選する。

・研究方法：独居認知症高齢者のケアマネジメントに精通した 8 名の熟練ケアマネジャーに、インタビュー調査から抽出した 219 項目を提示し、項目内容の重要性、文章表現の抽象度についての検討を行い項目を精選した。合わせて、認知症高齢者の在宅ケアに精通した研究者で項目表現の検討を行った。

（2）尺度原案作成のための予備調査

①予備調査 1

・研究目的：独居認知症高齢者のケアマネジメント実践について、主任ケアマネジャーに対するインタビュー調査、エキスパートレビューにより精選した 56 項目を用いて調査を行い、独居認知症高齢者に焦点をあてたケアマネジメント実践力を測定する項目案を検討する。

・研究方法：A 県内の 2 地域のケアマネジャーを対象に無記名自記式質問紙調査を行った。質問紙はケアマネジャー連絡協議会を通して郵送および研修会にて 442 名に配布、郵送により回収した。

・調査期間：2013 年 3 月～4 月上旬であった。

・調査内容：基本属性、独居認知症高齢者のケアマネジメント経験、独自に作成した独居認知症高齢者のケアマネジメント実践に関する 56 項目である。合わせて、質問紙についてのわかりにくい点等を尋ねた。

・分析方法：56 項目の回答傾向の分析、項目に関する自由記述内容を検討した。

②予備調査 2

・研究目的：予備調査 1 で精選した尺度項目案（43 項目）を用いた調査を実施し項目を精錬し、独居認知症高齢者に焦点をあてたケアマネジメント実践力を測定するための尺度（原案）を作成する。

・研究方法：関東地方および東北地方の 4 都県のケアマネジャーを対象に無記名自記式質問紙調査を行った。質問紙は郵送およびケアマネジャー連絡協議会等の研修会にて 1066 名に配布、郵送により回収した。

・調査期間：2013 年 6 月下旬～8 月上旬であった。
・調査内容：基本属性、独居認知症高齢者のケアマネジメント経験、予備調査 1 において検討した独居認知症高齢者のケアマネジメント実践 43 項目である。
・分析方法：項目分析および、項目に関する自由記述内容の検討を行い文章表現を修正し尺度（原案）を作成する。

(3)全国の居宅介護支援事業所に勤務するケアマネジャーを対象とした郵送調査
・研究目的：予備調査 2 で作成した 43 項目の尺度（原案）を用いて全国調査を行い、独居認知症高齢者ケアマネジメントスキル尺度を完成し、信頼性と妥当性を検証する。
・研究方法：全国（東北 3 県を除く)の居宅介護支援事業所 34,447 カ所から無作為抽出(1/7 系統抽出)した 4,921 事業所のケアマネジャーを対象として無記名自記式質問紙を用いた郵送調査を行った。
・主な調査内容：基本属性、「独居認知症高齢者ケアマネジメントスキル尺度」（原案）、基本属性、専門資格（主任ケアマネジャー）の保有の有無、ケアマネジャーの経験年数、独居認知症者の受け持ち経験数、ケアマネジメント業務自己評価尺度などである。
・不達票 158 を除いた配布数は 4,763 であり、回収数は 2,054 である（回収率 43.1%）、独居認知症高齢者のケアマネジメント経験のない者、回答に不備のあるもの等 124 名を分析から除外し 1,930 名を分析対象とした。
・調査期間：2013 年 11 月～12 月であった。
・分析方法：項目分析、探索的因子分析、内的整合性による信頼性の検討、ケアマネジメント業務自己評価尺度との相関による併存妥当性の検討、主任ケアマネジャー資格の有無、独居認知症高齢者経験事例数による基準関連妥当性の検討、構造方程式モデリングによる構成概念妥当性（因子的妥当性）の検討を行った。モデルの妥当性の判定には適合度指標である GFI、AGFI、RMSEA、CFI を用いた。

４．研究成果

4.研究の成果

(1) 尺度項目の作成

①主任ケアマネジャーへのインタビュー調査による項目案の作成

インタビューの逐語録から、独居認知症高齢者のケアマネジメント実践について述べられている部分を抽出し、内容の類似性により項目を整理した結果、尺度項目案は 219 項目となった。

②エキスパートレビュー、研究者による検討による項目案の精選

エキスパートレビューにより尺度項目として必要性が高くない項目を削除、文章表現の抽象度を揃えて尺度項目案を修正した結果、項目案は 56 項目となった。

(2) 尺度原案作成のための予備調査

①予備調査 1

回収数は 184(回収率 41.6%)であり、所属が居宅介護支援事業所、地域包括支援センター以外の者等を除外した 172 名（男性 28 名、女性 144 名）を分析対象とした。平均年齢は 49.6±8.7 歳であった。独居認知症高齢者ケアマネジメント経験事例数（未回答者除く）なしは 8 名(4.8%)であり、対象者の約 95%が独居認知症高齢者のケアマネジメント経験を有していた。

独居認知症高齢者のケアマネジメントの経験がある者について、56 項目の回答傾向を分析し、回答に偏りのある項目を検討した。また、自由記述で項目内容の重複、表現のわかりにくさ等の指摘があった項目の修正をはかり、43 項目の尺度項目案とした。

②予備調査 2

回収数は 353(回収率 33.1%)であり、所属が居宅介護支援事業所以外の者等を除外した 334 名を分析対象とした。独居認知症高齢者のケアマネジメント経験なしは 17 名(5.1%)であり、予備調査 1 と同様、ケアマネジャーの約 95%が独居認知症高齢者のケアマネジメント経験があることがわかった。

独居認知症高齢者のケアマネジメント経験がある者の 43 項目への回答を分析した結果、天井効果、フロアー効果のある項目はなかった。項目間相関が 0.7 以上の項目と、自由記述において項目表現に関する内容の指摘があった項目の内容、文章表現を修正し、43 項目から成る「独居認知症高齢者ケアマネジメントスキル尺度」（原案）を作成した。

(3)全国の居宅介護支援事業所に勤務するケアマネジャーを対象とした郵送調査

対象者の背景

対象者は男性 427 名、女性 1503 名で、平均年齢は 49.9±9.1 歳であった。在宅のケアマネジャーの平均経験年数は 7.4±3.8 年、認知症高齢者を対象とした平均職務経験年数は 11.5±5.8 年であった。独居認知症高齢者ケアマネジメント経験事例数は、1 事例 95 名（4.9%）、2 事例 176 名（9.1%）、3 事例 173 名（9.0%）、4～6 事例 408 名（21.1%）、7～9 事例 272 名（14.1%）、10～19 事例 349 名（18.1%）、20 事例以上 457 名（23.7%）であった。

①項目分析

43 項目のなかで天井効果・フロアー効果のある項目はなかった。項目間相関が 0.7 以上であった 8 項目を削除し 35 項目とした。

②探索的因子分析

最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子数は、因子の解釈可能性を考慮し 6 因子解を採択した。因子負荷が 0.45

未満の項目と、複数に因子負荷の高い項目を削除し分析を繰り返し、6因子26項目とした。
6 因子は、それぞれ「生活実態の観察（8項目）」「チーム機能の活用（5 項目）」「心情の推察（4 項目）」「近隣との連携（3 項目）」「家族との連携（3 項目）」「サービス利用の支援（3 項目）」と命名した。

③内的整合性による尺度の信頼性の検討
クロンバックのα係数は、各因子は 0.809～0.885 であり、尺度全体では 0.944 であった。内的整合性による信頼性が確保されていることが示された。

④ケアマネジメント業務自己評価尺度との相関による併存妥当性の検討
尺度得点と、ケアマネジメント業務自己評価尺度得点との間に有意な相関が認められ、併存妥当性が示された。

⑤主任ケアマネジャー資格の有無、独居認知症高齢者経験事例数による基準関連妥当性の検討
尺度得点は、主任ケアマネジャー資格ありの者が有意に高く、また、独居認知症高齢者経験事例数の多い者が有意に高く、基準関連妥当性が示された。

⑥構造方程式モデリングによる構成概念妥当性（因子的妥当性）の検討
探索的因子分析によって抽出された 6 因子を第 1 次因子、独居認知症高齢者のケアマネジメントスキルを第 2 次因子とする二次因子モデルを作成し、構造方程式モデリングを用いて検証した結果、モデルの適合度は GFI=0.931 、 AGFI=0.917 、 RMSEA=0.051 、 CFI=0.947 であり、いずれも受容基準を満たしていた。また、観測変数から第 1 次因子、第 1 次因子から第 2 次因子へのパス係数は 0.61～0.885 の範囲にあり、十分な大きさの正の値を示した。構成概念妥当性（因子的妥当性）が確保されていることが示された。

本研究で開発された6因子26項目からなる「独居認知症高齢者ケアマネジメントスキル尺度」は、十分な信頼性と妥当性を備えていることが検証された。

今後は、対象を変えて調査を行い交差妥当性について検討する必要がある。
本尺度は認知症高齢者への支援経験の少ないケアマネジャーに対する教育的アプローチ、ケアマネジャーの継続研修における自己啓発の資料として活用することにより、独居認知症高齢者に対する支援力量の向上に寄与することができると考える。今後、独居認知症高齢者へのケアマネジメントにおける有用性について検証していく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　8　件）
①浅川典子,細谷たき子,小林淳子,叶谷由佳：独居認知症高齢者ケアマネジメントスキル尺度の開発, 第 73 回日本公衆衛生学会, 2014 年 11 月 5～7 日,栃木
②浅川典子,細谷たき子,叶谷由佳:「独居認知症高齢者に対するケアマネジメント実践」を測定する尺度（原案）の作成,第 13 回日本ケアマネジメント学会,2014 年 7 月 19 日～20 日,新潟
③浅川典子,細谷たき子,小林淳子,叶谷由佳:『独居認知症高齢者に対するケアマネジメント実践』を測定する項目の検討,第 18 回日本在宅ケア学会,2014 年 3 月 16 日,東京
④浅川典子,細谷たき子,小林淳子,叶谷由佳：ケアマネジャーが独居認知症高齢者のケアマネジメントにおいて感じる困難の内容,第 16 回北日本看護学会学術集会,2013 年 8 月 31 日,山形
⑤浅川典子,細谷たき子,小林淳子,叶谷由佳：独居認知症高齢者のケアマネジメントに関する研究,第 15 回北日本看護学会学術集会,2012 年 9 月 2 日,宮城
⑥浅川典子,細谷たき子,叶谷由佳：独居認知症高齢者を支援する主任ケアマネジャーの施設入所に関する判断,第 16 回日本在宅ケア学会,2012 年 3 月 18 日,東京
⑦浅川典子,細谷たき子,小林淳子,叶谷由佳：独居認知症高齢者へのサービス導入後のモニタリングとかかわり方の特徴　主任ケアマネジャーへのインタビュー調査の結果から,日本老年看護学会第 17 回学術集会,2012 年 7 月 15 日,石川
⑧浅川典子,細谷たき子,叶谷由佳：独居認知症高齢者に対する支援開始時のケアマネジャーのかかわり方の特徴,第 13 回日本認知症ケア学会,2012 年 5 月 20 日,静岡

６．研究組織

(1)研究代表者
浅川　典子（ASAKAWA Noriko）
埼玉医科大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：００３１０２５１
(2)連携研究者
細谷　たき子（HOSOYA Takiko）
山形大学・医学部・教授
研究者番号：８０３１３７４０